

Title	バリ宗教と人類学 : 人類学的解釈学の探求
Author(s)	吉田, 竹也
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49451
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	よし だ たけ や 吉 田 竹 也
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)
学位記番号	第 2 2 3 7 0 号
学位授与年月日	平成 20 年 5 月 27 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	バリ宗教と人類学—人類学的解釈学の探求—
論文審査委員	(主査) 教授 小泉 潤二 (副査) 教授 中川 敏 教授 春日 直樹 教授 栗本 英世

論文内容の要旨

本稿は、すでに出版した『バリ宗教と人類学 — 解釈学的認識の冒険』の議論内容はほぼそのままに、ただ紙幅の制限から出版の際に割愛した議論などをあらためて盛りこみ、学位請求論文としたものである。以下、論文の主旨を、本稿の章立てに沿って要約していく。

序論では、本稿の主題について簡単に論じた。端的に言えば、本稿の主題は「バリ宗教」を解釈学的認識に立って論じようとする点にある。ここでいう解釈学的認識とは、人類学的な議論対象を意味構成体ないし解釈として定位するとともに、人類学的な議論それ自体をもひとつの意味構成体ないし解釈とみなす立場である。本稿の理論的関心の焦点は、この後者の解釈ないし表象の系を前者に関する議論に繰りこみつつ考察しようとする点にある。このような論点は、既存の人類学的研究においてはまったく追求されていないといえる。本稿では、解釈人類学との混同を避けるという意図もこめて、この本稿の立場を暫定的に「人類学的解釈学」と呼ぶことにした。

第 I 章では、人類学の学説史的整理、とりわけ、解釈人類学を批判的に消化しつつ登場したポストモダン人類学や構築主義についての検討を通して、序論で示した解釈学的認識の徹底という論点をあらためて明らかにした。これら 2

つの立場は、解釈人類学を徹底したところにおのずと生まれたものだといえるが、いずれの立場も懐疑論や無限後退に陥るリスクをはらんでいる。しかし、ある種の実証的な研究を志向する立場から、あらためて解釈学的認識を主題化しようとするところこそ、人類学が探求すべきひとつの立場であると考えられる。第1節では、こうした点について論じつつ、序論で触れたバリ宗教をめぐる人類学的解釈学、具体的にはバリ宗教にたいする今日のバリ人の解釈と人類学的研究に記載される解釈との関係性について論じる上での、具体的な見通しについて触れた。また第1章では、第2節において、そのための具体的なアプローチの見通しについて論じるとともに、第3節において、バリに関する先行研究の整理をおこなった。

第2章では、クリフォード＝ギアツのバリ研究をとりあげ、その民族誌的記述の検討を通して、彼のバリ論が本稿の主張する解釈学的認識を体現したものとはいえないことをあらためて指摘するとともに、戦後のバリ研究進展の中心人物だったといえるギアツの一連のバリ社会・文化論の中に、戦前以来のバリ研究に連綿と受け継がれている紋切り型の理解枠組が明瞭に看取しうることを確認した。もっとも、彼の宗教論自体は、こうした理解枠組とは別のバリ宗教論の可能性を示唆する一面ももっていた。

第3章では、そうしたギアツの示唆するオルターナティブなバリ宗教理解の可能性を、1990年代のバリ人のバリ宗教認識と宗教実践を記述的に明らかにすることから、探求しようとした。そこで明らかになったのは3つの点である。ひとつは、今日のバリ人のバリ宗教理解の枠組と、既存の人類学が構築したバリ宗教にたいする理解枠組とが、おどろくべき懸隔を示しており、しかもこのことを明確に問題提起した議論がこれまでほとんど存在しなかったという点である。もうひとつは、戦後の宗教改革運動の過程で次第に人々に浸透するようになった宗教理念や規範と、人々の実際の宗教活動との間にも、無視しえない懸隔が存在するという点である。今日のバリ人において支配的な宗教観は、この点で、上から浸潤したイデオロギー的なものだといえる。そしていまひとつは、このイデオロギーと人々の宗教生活における慣習的な実践とが、なお微細なレベルでせめぎあっているという点である。大枠のところでは、人々の宗教生活はこのイデオロギーによって規定されているが、一方ではイデオロギーが既存の宗教実践との妥協の上に再解釈されて浸透しつつあるという状況もまたみられる。既存の研究は、アガマのイデオロギー、あるいはその背後にあるパンチャ＝シラのイデオロギーの浸透による伝統的宗教の合理化という直線的

な図式によって、バリあるいはインドネシア諸社会の戦後の宗教動向を把握しようとしてきたが、本稿ではこの微細な解釈過程に注目し、既存の研究とは異なる理解を提起した。

第4章では、第3章で指摘した第1点の懸隔の起源を探るべく、植民地時代に遡行して、バリ人側のバリ宗教理解枠組とバリ研究者側の理解枠組の構築・再構築の過程を素描しようとした。植民地時代は、人類学者・植民地統治者・外国人観光客らが共同で構築したバリ宗教表象枠組——そもそもバリ宗教を「宗教」とみなすという点もふくめて——が多大な影響力をふるい、この表象枠組に即した宗教文化の実態がすくなくとも部分的に構築された時代であった（第1節）。人類学者やその友人のバリ文化研究者は、単にバリ宗教文化を記述し民族誌の中に書きとめただけでなく、実際のバリ宗教文化のあり方を変えることに「貢献」もした（第2節）。西欧側の表象こそ、バリの社会・文化・宗教を規定するものだった。一方、植民地時代のバリ人エリート、とくに平民層出身の新興エリート集団は、こうした西欧側の表象とある意味で対照的なバリ宗教表象枠組を構築しようとした。この表象枠組は、結果的に戦後のバリ宗教改革運動の基盤を提供するものとなった。もっとも、戦後の改革運動の担い手になったのは、この平民層エリート集団が批判した高カスト、とくにブラフマン層だったのであり、戦前と戦後の宗教改革運動の間にはある種の曲折や不連続性もある（第3節）。

第4章第4節および結論では、それまでの議論を整理し、本稿の議論をまとめた。結局、本稿は、人類学的研究とバリ宗教との過去と現在における関係性を批判的に検討し、これをそれほど遠くない未来における、これまでとは別様の関係性についての示唆へと媒介することで、人類学的バリ研究の限界から、逆にその可能性を読みとろうとするものだったといえる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、2005年に風媒社より公刊された『バリ宗教と人類学——解釈学的認識の冒険』を改訂したものである。バリの宗教に焦点を合わせる民族誌であるとともに、理論的には主にクリフォード＝ギアツの文化理論に対する批判を意図している。本論文は、バリ宗教を「解釈学的認識に立つて」論じようとする。バリ宗教という人類学的な議論の対象を意味構成体として捉えるとともに、人類学的な議論それ自体も意味構成体として同じ地平に

捉え、後者を前者に繰り込みつつ考察しようとする自己言及的な立場をとっている。

この点を本論文全体の主題として、第I章では解釈人類学とポストモダン人類学と構築主義を中心に、人類学の学説史について整理を行い、またバリに関する先行研究の整理を行っている。とくに「今日のバリ人自身の解釈」と「人類学的研究に記述される解釈」の関係性が重視される。

第II章では、クリフォード・ギアツによるバリ研究が、本論文のいう「解釈学的認識」とは異なるものであること、ギアツによる研究が必ずしも「厚い」記述とはなっておらずそこには戦前からのバリ研究に受け継がれる紋切型の理解枠組が見られること、しかしギアツの宗教論にはこれまでとは異なるバリ宗教論の可能性が示唆されていることを指摘している。

第III章では、この新しい宗教理解の可能性を求めて、バリの宗教認識と宗教実践の実際を明らかにしようとした。その結果、本論文が示したのは、バリ人によるバリ宗教理解の枠組と、人類学が構築したバリ宗教理解の枠組とが乖離していること、またバリ人自身の宗教理念や規範とその人々の現実の宗教活動とがかけ離れていることだったという。これを本論文は、今日のバリにおいて支配的な宗教がイデオロギー的なものであること、またそのイデオロギーが既存の宗教実践との調整により再解釈されて浸透していることから理解しようとする。その結果本論文は、バリ宗教のダイナミズムを、アガマのイデオロギーやパンチャ＝シラのイデオロギーによる伝統的宗教の合理化という単線的な図式で理解することに異を唱えることになる。

第IV章では、バリ人によるバリ宗教の理解と人類学によるバリ宗教の理解の懸隔の起源を植民地時代に求め、一方でバリ人、他方で研究者による枠組構築と再構築の過程を描こうとしている。人類学者と植民地統治者と観光客によりバリ特有の表象が構築されること、平民層出身の新興エリートによりそれとは対照的な表象が構築されること、そしてそうした表象と戦後バリの宗教改革運動とがどのような関係にあるかを描き出そうとしている。

本論文については、調査者とバリ人との関係、自己言及のあり方、「現地の」解釈の位置づけ、構築主義の捉え方、理論と民族誌の相互関係、ギアツ批判についての批判などについて、論ずべき点が多くある。しかし「祈り」の分析など斬新な視点が含まれ、バリ宗教の現実についての理解を進めるものであると同時に、人類学的理解についての議論を活性化するものであると認められる。

以上から本論文は博士（人間科学）の学位を授与するにふさわしいとの審査結果に至った。